# 南瓜

芥川龍之介

何しろ南瓜（かぼちや）が人を殺す世の中なんだから、驚くよ。どう見たつて、あいつがそんな大（だい）それた真似をしようなんぞとは思はれないぢやないか。なにほんものの南瓜（かぼちや）か？　冗談（じようだん）云つちやいけない。南瓜は綽号（あだな）だよ。南瓜の市兵衛（いちべゑ）と云つてね。吉原（よしはら）ぢや下つぱの――と云ふよりや、まるで数（かず）にはいつてゐない太鼓持（たいこもち）なんだ。

そんな事を聞く位ぢや、君はあいつを見た事がないんだらう。そりや惜しい事をしたね。もう今ぢや赤い着物を着てゐるだらうから、見たいつたつて、ちよいとは見られるもんぢやない。頭でつかちの一寸法師（いつすんぼふし）見たいなやつでね、夫（それ）がフロツクに緋天鵞絨（ひびろうど）のチヨツキ

と云ふ拵《こしら》へなんだから、ふるつてゐたよ。おまけにその鉢《はち》の開《ひら》いた頭へちよんと髷《まげ》をのつけてゐるんだ。それも粋な由兵衛奴《よしべゑやつこ》か何かでね。だから君、始めて遇《あ》つたお客は誰でもまあ毒気《どくき》をぬかれる。すると南瓜のやつは、扇子で一つその鉢の開いた頭をぽんとやつて、
「どうでげす。新技巧派の太鼓持《たいこもち》もたまには又乙《おつ》でげせう」つて云ふんだ。悪い洒落《しやれ》さね。

　洒落と云へば、南瓜《かぼちや》にや何一つ芸らしい芸がない。唯お客をつかまへて、洒落放題《しやれはうだい》洒落る丈《だけ》なんだ。それが又「にはかに洒落られません」つて程にも行《ゆ》かないんだから［＃「行《ゆ》かないんだから」は底本では「行《ゆか》ないん

だから」、心細いやね。尤もそこはお客もお客で曲りなりにも洒落のめせば、それでもう多曖なく笑つてゐる。云はば洒落のわかつたのが、うれしくつてたまらないと云ふ連中ばかりなんだ。

あいつも始はそれが、味噌気だつたんだらう。僕が知つてからも、随分いい気になつて、擽つたもんさ。所がいくら南瓜だつて、さう始終洒落てばかりゐる訳にや行きやしない。たまには改まつて、真面目な事も云ふ時がある。が、お客の方ぢや南瓜は何時でも洒落るもんだと思つてゐるから、いくらあいつが真面目な事を云つたつて、やつぱり腹を抱へて笑つてゐる。そ

こがこの頃になつて見ると、だんだんあいつの気になり出したんだ。あれで君、見かけよりや存外神経質な男だからね。いくらフロツクに緋天鵞絨のチヨツキを着て由兵衛奴の頭を扇子で叩いてゐたつて、云ふ事まで何時でも冗談だとは限りやしない。真面目な事を云ふ時は、やつぱり真面目な事を云つてゐるんだ、事によるとお客よりや、もつと真面目な事を云つてたかも知れない――とまあ、僕は思ふんだがね。だからあいつに云はせりや「笑ふ手前が可笑しいぞ」位な気は、とうの昔からあつたんだ。今度のあいつの一件だつて、つまりはその不平が高じたやうなもんぢやない

か。

　そりや新聞に出てゐた通り、南瓜（かぼちや）が薄雲太夫（うすぐもだいふ）と云ふ華魁（おいらん）に惚（ほ）れてゐた事はほんたうだらう。さうしてあの奈良茂（ならも）と云ふ成金（なりきん）が、その又太夫（たいふ）に惚れてゐたのにも違ひない。が、なんぼあいつだつてそんな鞘当筋（さやあてすぢ）だけぢや人殺しにも及ぶまいぢやないか。それよりあいつが口惜（くや）しがつたのは、誰もあいつが薄雲太夫に惚れてゐると云ふ事を、真（ま）にうける人間がゐなかつた事だ。成金のお客は勿論、当の薄雲太夫にした所で、そんな事は夢にもないと思つてゐる。尤（もつと）もさう思つたのも可愛（かはい）さうだが無理ぢやない。向うは仲（なか）の町（ちやう）でも指折

りの華魁(おいらん)だし、こつちは片輪も同様な、ちんちくりんの南瓜だからね。かうならない前に聞いて見給へ。僕にしたつて嘘だと思ふ。それがあいつにやつらかつたんだ。別して惚れた相手の薄雲太夫が真にうけないのを苦に病(や)んだらしい――だからこその人殺しさ。

　何でもその晩もあいつは酔つぱらつて薄雲太夫(うすぐもだいふ)の側へ寄つちや、夫婦になつてくれとか何(なん)とか云つたんださうだ。太夫(たいふ)の方(はう)ぢや何時(いつ)もの冗談(じようだん)と思ふから、笑つてばかりゐて相手にしない。しないばかりなら、よかつたんだが、何かの拍子(ひやうし)に「市兵衛(いちべゑ)さんお前妾(わちき)に惚(ほ)れるなら、命がけで惚れなまし」つて云つたんださう

だ。それがあいつの頭へぴんと来たんだらう。おまけに奈良茂（ならも）がその後（あと）から、「かうなると汝（われ）と己（おれ）とは仇（かたき）同志や。今が今でも命のやりとりしてこまそ」って、笑つたと云ふんだから機会（きつかけ）が悪い。すると、南瓜（かぼちや）は今まではしやいでゐたやつが、急に血相（けつさう）を変へながら坐り直して――それから君、何をやつたと思ふ。あいつがそのとろんこになつた眼を据ゑてハムレツトの声色（こわいろ）を使つたんだ。それも英語で使つたんだと云ふから、驚かあね。

　これにや一座も、呆気（あつけ）にとられた。――とられた筈さ。そこにゐた手合（てあひ）にや、遊扇（いうせん）にしろ、蝶兵衛（てふべゑ）にしろ、

英語の英の字もわかりやしない。其角（きかく）だつて、「奥（おく）の細道（ほそみち）」の講釈はするだらうが、ハムレットと来た日にや名を聞いた事もあるまいからね。唯その中でたつた一人、成金（なりきん）のお客にやこれがわかる——そこは亜米利加（アメリカ）で皿洗ひか何かして来ただけに、日本の芝居はつまらないとあつて、オペラコミツクのミス何（なん）とかを贔屓（ひいき）にしてゐると云ふ御人体（ごにんてい）なんだ、がもとより洒落（しやれ）だと心得てゐたから、南瓜が妙な身ぶりをしながら、薄雲太夫をつかまへて、「You go not till I set you up a glass/Where you may see the inmost part of you.」とか何（なん）とか云つても、不相変（あひかはらず）げらげら笑つてゐ

たさうだがね。——そこまでは、まあよかつたんだ。それがハムレットの台辞(せりふ)よろしくあつて、だんだんあいつが太夫(たいふ)につめよつて来た時に、間(ま)の悪い時は又間の悪いもので、奈良茂(ならも)の大将が一杯機嫌でどこで聞きかじつたか、「What, ho! help! help! help!」とポロニアスの声色(こわいろ)を使つたぢやないか。南瓜のやつはそれを聞くと、急に死人のやうな顔になつて、息がつまりさうな声を出しながら、「How, now! A rat? Dead for a ducat, dead!」と云ふが早いか、いきなり奈良茂(ならも)の側にあつた鮫鞘(さめざや)の脇差(わきざし)を引(ひつ)こぬいて、ずぶりと向うの胸へ突(つつ)こんだんだ。そこでほんもののポロニアスなら

「Oh! I am slain.」と云ふ所なんだが、刀は切れるし、急所だし、うんと云つたきりお客は往生さ。その血の出た事つたらなかつたさうだよ。

「見やあがれ。己だつて出たらめばかりは云やしねえ。」——南瓜はさう云つて、脇差を抛り出したさうだがね。返り血もかかつたんだらうが、チヨツキが緋天絨鵞なので、それがさほど目に立たない。人を殺したつて、殺さなくつたつて、見た所はやつぱりちんちくりんの、由兵衛奴にフロツクを着た、あの南瓜の市兵衛が、それでもそこにゐた連中にや、別人のやうに見えたんだらう。——見えたんぢやない。まるで別

人になつてしまつたんだ。だから、あいつが御用(ごよう)になつて、茶屋の二階から引立(ひつた)てられる時にや、捕縄(とりなは)のかかつた手の上から、桐(きり)に鳳凰(ほうわう)の繍(ぬひ)のある目のさめるやうな綺麗(きれい)な仕掛(しかけ)を羽織(はお)つてゐたと云ふぢやないか。なに誰の仕掛だ。勿論薄雲太夫(うすぐもだいふ)のさ。

それ以来吉原(よしはら)は、今でもあいつの噂(うはさ)で持ちきつてゐるやうだ。兎(と)に角(かく)これで見ても、何(なん)でも冗談(じようだん)だと思ふのは危険だよ。笑つて云つたつて、云はなくつたつて、真面目(まじめ)な事はやつぱり真面目な事にちがひないからね。

（大正七年二月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。